

## 理想団の研究 [II]

有 山 輝 雄

1. 理想団生成の背景
2. 理想団の結成
3. 理想団の組織
4. 理想団の活動——東京本部（以上前号）
5. 地方支部（以下本号）
6. 第2期の理想団
7. 第3期の理想団

### 5. 地方支部

理想団地方支部として存在が確認できるのは、常総、千葉、木下町（以上千葉県）、土浦（茨城県）、浦和町、入間、忍町、本庄町（以上埼玉県）、久良岐、横浜（以上神奈川県）、信濃尻村、安筑、小県、小諸（以上長野県）、札幌（北海道）、静岡（静岡県）である。これら地方支部が設立された地方において理想団本部あるいは萬朝報社が組織拠点を以前から保有していたわけではない。新聞販売店が販売拡張のために理想団支部を結成した可能性も考えられなくはないが、今回の調査ではそのような形跡はない。支部は地方団員の自主的活動のなかから成立したものであった。それだけに、これら地方支部の組織を明らかにすることによって、「平和なる檄文」を始めとし「萬朝報」に掲載された理想団の呼びかけが地方においてはどのような通路によって伝達されていったか、時にはどのような歪曲が生じたかを知ることが可能であろう。先に理想団員の加入状況における東京と地方の比較考察から地方では第二次的第三次的影響の波及が生じたのではないかという仮説を示し

たが、地方支部を考察することによってどのような人物・集団の媒介を経て波及していったかをある程度明らかにすることができるであろう。以下、組織実態不詳の支部もいくつかあるが、「萬朝報」に拠る理想団本部からの影響の流れという観点から地方支部を見ていくことにする。「萬朝報」の影響の流れという観点から地方支部をみるならば、次の三つの類型に分けることができる。1、地域団体・青年団体等から成立した支部、2、キリスト教関係者を中心に成立した支部、3、社会主義者を中心に成立した支部。いずれの支部も様々な要素を含み、単一の性格で覆うことは難しく、特にキリスト者と社会主義者は末分化であることが多いが、一応三類型に区別することができる。

#### 1. 地域団体・青年団体等から生まれた支部。

このような支部の一例として埼玉県浦和町支部をあげることができる。また青年団体等が理想団に共感を示した例として埼玉青年正気会等がある。

埼玉青年正気会は、理想団の檄文に最も早く反応を示した団体の一つで、理想団発会式には埼玉青年正気会幹事小倉吉太郎が同会を代表して祝詞を朗読した。同会の詳細は不明だが、「萬朝報」の紹介によれば埼玉県児玉郡本庄町に所在し、規約条項及び役員は次の通りである。<sup>1)</sup>

(第1条第2条省略)

第三条 本會は自省已を鍛へ以て徳義を煥發し之を實踐勵行し延て社會の弊風を矯正するを以て目的とす

第四条 本會は毎月數回會合し智識を涵養する爲め學術の研究、討論、又は演説等を爲すものとす

第五条 本會會員たる者は左の數項を嚴守する者とす

- 1 皇室を尊奉し諸ての人を愛する事
- 2 飲酒を慎み姦淫を禁じ優美高尚の氣風を養成する事
- 3 從來家族間に□る弊風を矯正し以て一家團樂の實を擧ぐる事

1) 「萬朝報」1901年7月22日。紙面には活字不鮮明のため判読困難な箇所が数箇所あった。

4 奢侈怠惰の慣習を打破し以て勤儉力行の美德を發養する事

5  を  し博愛  の恩  を以て社會に立つ事

第六条 本會は主義宗教を論ぜず本會の目的を賛成する者は何人にてても會員たる事を得

(第七条～第廿条略)

發起人

早野道三郎 小野篤二郎 小倉吉太郎 小野道三郎 吉田勝太郎

若山忠造 高柳  五郎 高橋恵作 中山孝三郎 久保田次郎吉 山崎久吉

この規約によれば、埼玉青年正気会は各人の「自省」と徳義の「実践励行」によって社会の矯正をはかろうとする地方青年団体であった。実践しようとするのは、禁酒勤儉等日常生活における具体的徳目である。彼等は理想団の唱える「社会改良」「自省」「修養」等をキリスト教や社会主義思想とは無関係に日常道德の実践としての側面において理解したのである。「皇室尊奉」を掲げている点も、この会の考える「自省」と理想団の「自省」とでは大分異なることが窺える。だが、このような青年団体も理想団に共鳴した。發起人のうち久保田次郎吉、小倉吉太郎、早野道三郎の3名が理想団名されている。<sup>2)</sup> 一般団員がどの程度迄加入したかは不明だが、これら簿に登録理想団加入者を通して青年会内に理想団の影響が拡大していったことは推測に難くない。本庄町では1902年9月28日に理想団本庄支部が発会し、本部から黒岩周六、ト部喜太郎、堺利彦、幸徳秋水が出席した。さらに同年10月12日には理想団演説会が開催されるなどの活動が行なわれている。<sup>3)</sup>

自己の周辺の「腐敗」に対し日常道德実践による社会改良を企てる埼玉青年正気会のような団体は、恐らく本庄町における特殊例ではない。それは、

2) 「萬朝報」掲載の加入者報告によれば、

埼玉県児玉郡北泉村、久保田次郎吉 (1901年7月13日)

埼玉県児玉郡本庄町小倉山、小倉吉太郎、早野道三郎 (1901年7月24日)

これら人物の経歴等は不明。

3) 1903年1月7日に本庄支部新年会が開催されているが、その後の活動は不明。

各地でこの時期勃興しつつあった青年団運動と同根の運動であったであろう。無論、このような運動は後には官製の青年団運動や地方改良運動に再編吸収されていくのであるが、この時期には「萬朝報」の理想団などにも共感を寄せ、期待していたのである。青年運動としてもいまだ方向を把握せず、不定形の状態であったのであろう。例えば、1903年幸徳秋水は札幌からの帰途陸前佐沼町の理想団員の招きで同地に立寄ったが、幸徳を歓迎する理想団有志午餐会には「町長、郡町村吏員、中小學教師の人々始め四十餘名」が集まった。幸徳によれば「此地には青年革新會なる一團結ありて、毎月集會して諸種の研究討論をなし、且つ常に社會公共の事に盡力せる由、又近村なる石森村といへるにも弘道會なる青年の團結ありて、共有の文庫を設立して、讀書の風熾なり」<sup>4)</sup> という状況であったという。これら青年運動と地元理想団員とが深い関係にあったことは容易に推測できる。しかも、幸徳秋水を歓迎した地元理想団員の一人である佐々木万太郎なる人物は、のちの「平民新聞」に「社会主義の熱心なる一信者」と名乗りをあげている。<sup>5)</sup> 在地の理想団は青年運動等と結びつき町長以下町の有力者を動員するほど地域に密着し、しかもそこから社会主義者も派生する可能性さえあったのである。

会の実態は不明だが会長以下23名の正会員、18名の賛助会員が一括して理想団に加入した北海道利尻矯風会、また38名が加入した神奈川県久良岐郡日下村（久良岐支部）、35名が加入した茨城県鹿島郡矢田部村、益子博以下58名が加入した茨城県多賀郡鮎川村、あるいは長野県信濃尻村、飯田町、福島県平等<sup>6)</sup> も風俗改良団体や青年集団が日常道德の実践運動として理想団を理

4) 幸徳秋水「北遊漫録」『幸徳秋水全集、第4巻』（1968年、明治文献）334ページ。

5) 「平民新聞」1904年2月21日「予は如何にして社会主義者となりし乎」

6) 下伊那地方は、周知の通り折から信濃青年会が発足するなど青年団運動の盛んな地方である。『下伊那青年運動史』等による限り、青年団運動と理想団との直接的関係は不明であるが、両者が同一の土壌にたつ運動であったことは推測できる。

福島県磐城平青年会は1902年8月31日に黒岩周六、幸徳秋水を招き講話会と理想団に関する談話会を開催している。（「萬朝報」1902年9月4日）

解し、一括加入したと推定できる。理想団は、このような団体に媒介されて拡大していったのである。

青年団体とは性格を異にするが、地方の政治団体が母体となって設立した支部として浦和支部がある。浦和支部は、1902年1月12日に発足したが、これを主唱したのは大島寛爾という人物である。<sup>7)</sup> 大島寛爾の経歴は不詳だが当時浦和町内において弁護士を開業し、同時に浦和町会議員（二級）も務めていた。また、野附常雄等と1901年4月1日評論社を起し、雑誌「評論」を刊行し活動の機関としていた。<sup>8)</sup> 雑誌「評論」は、「縣下、實業の發達を圖り政治の改善を期し社會の改良を企て教育の普及を講じ所謂縣下の幸福及繁榮を増進する」<sup>9)</sup> ことという一般的理念を掲げているが、評論社の「目的規約」をみる限り<sup>10)</sup> 独自の「政治改善社會改良」の綱領・政策を保有していたよう

7) 「萬朝報」1902年1月14日。浦和支部の発起式は「青年会」の会場で催され、「青年会」の大半の入団をえたと報道されているが、この「青年会」に関しては不明。恐らく大島寛爾等の指導するグループだと思われる。雑誌「評論」も1902年1月15日号、2月1日号が欠号のため理想団支部発会の詳細は分らない。

8) 「評論」1902年1月1日号掲載の評論社年頭挨拶によれば、評論社は大島寛爾、野附常雄、金子彌平、山本壽三郎、大網最正の合計5名である。

9) 「評論」1901年4月15日号

10) 評論社目的及規約は次の通りである。

#### 目的

- 1 評論ハ實業上ノ利害得失ヲ討尋シ廣ク實業上經濟上法律上ノ材料ヲ貢獻シ學理上又ハ實驗上ヨリ評論シテ當業上ノ考參ニ供スルヲ以テ目的トス
- 2 評論ハ各銀行會社各組合及實業家ノ通信機關ト爲リ大藏省、農商務省、遞信省、内務省、外務省等ニ就キ實業上ニ關係アル内外ノ報告及大審院、行政裁判所ニ於ケル重要ノ判決ヲ紹介シ政事上社會上ノ出來事ハ眞正確實ニ報道スルヲ本旨ト爲ス
- 3 評論ハ世ノ新聞雜誌カ法人個人ノ別ナク其營業上体面上ニ關シ登載シタル記事ニ付テ被害アリト思料シタル場合ニハ親シク其被害者ニ付テ事實ヲ查察シ其虚妄又ハ錯誤ニ出ルモノハ其事實ヲ明カニシテ之レカ妄ヲ辯シ専ラ實業家ノ營業上体面上ノ安全ヲ擁護スルヲ以テ本社ノ特色トス
- 4 評論ハ純粹ナル實業上ノ機關ナルヲ以テ政黨ニ關係セス不偏不黨ニシテ専ラ實業ノ發達進歩ヲ企圖スルモノトス
- 5 評論ハ毎月二回發刊スルモノトス但シ臨時發刊ノ必要アル場合ハ此限ニアラス

#### 規約

- 1 評論社ハ發刊賛成員二百名ヲ募集シ之レヲ維持會員トス
- 2 維持會員ハ滿二ケ年間毎月購讀代金壹圓ヲ齎出スルモノトス

にはみえない。寧ろ、県下実業家層の利益あるいは不満を具体化し代弁するところに自己の政治的役割を見出そうとしていたとみられる。「評論」において展開されているのは、一方では埼玉県政等に対する個別具体的意見・批判であり、また一方では既成の政治体制一般への不満であった。特に後者では、政治的には政府政党への不信と実業家の意見反映困難への不満、<sup>11)</sup> 経済的には「吾國今日の經濟家を見るに少々文明經濟の事情を解すと稱せらるるもの、徒に文明經濟の大規模を夢み忍苦は報酬に伴ふの大原則を忘れ身心を勞役せずして一獲千金の大利を得んとし投機的事業を営み虚業的相場を試み其局、産を破ぶり、身を滅し個人經濟を攪乱し國家經濟を紊乱」<sup>12)</sup> するという大資本の中小資本圧迫への不満であった。これらから「評論」が依拠しているのが、在地の中小実業家層であり、表明機会の乏しい彼らの鬱屈した不満を「評論」は代弁あるいは増幅していたとみることができるだろう。

そして、理想団設立が発表されるや、「評論」は「満腔の同情を理想団に寄す」という社説を掲載し、理想団との同盟と支部設置を呼びかけた。<sup>13)</sup>

3 維持會員ハ本會ノ主義目的ト他ヲ害セサル範圍内ニ於テ本會ト協議ノ上一時其機關ニ行使スルコトヲ得

4 維持會員ハ其義務ニ屬スル購讀代金ヲ前納スルモノトス但シ數月分若シクハ全額ヲ即納スルモ妨ナシ

5 維持會員ハ滿二ケ年後又ハ購讀代金全部即納シタルトキハ永ク本社ノ名譽會員ニ載キ每號無代價ヲ以テ贈呈スルモノトス

目的の第三項は新聞雑誌の報道による被害救済、反論機会提供を一般的に定めているようにみえるが、規約第三項等に合せて考えれば、実業家の個別利益代弁特に維持會員の代弁であることは明らかである。恐らくブラックジャーナリズムと区別し難い活動も行なっていたとみられる。

11) 例えば、「評論」は「政黨を解散し選挙人の合同を圖る能はずんば寧ろ各實業家團體より代議士を選出せよ、是れ実に實業家諸君の危険を防止するの策なり、自家権利の防禦策なり」と提案し、実業家の意見表明機会拡大を唱えている。「評論」1902年5月1日号「總選挙に對する吾人の希望(二)」

12) 「發刊の辭」「評論」1901年4月1号

13) 「評論」1901年8月15日号

「萬朝報」は、1901年8月22日号「言論」欄に「反響の一端」と題しこの「評論」社説を轉載し、「斯る有力者の一致加盟を得るハ、理想団の爲めに一大援助たること言ふまでもなし」と述べている。

「評論」が理想団に最も共感したのは、「社會の上流者が自ら濁流の泉源」となっている状況認識であり、また「評論」自体が「社會革新の急先鋒」たらしめているとき「腐敗濁流の中央に於て有力なる同志」をえたことと称されている。即ち、「評論」のもっている不満を中央レベルにおいて表明してくれる機関として理想団に期待したのである。そこでは、理想団の社会腐敗批判の側面に重点がかかり、各個人の「修養・自省」から社会改良を志向する側面は軽視された。それは、理想団の趣旨の歪曲ではあったが、「評論」の媒介によって理想団の影響は拡大し、支部が設置されたのである、さらに、大島寛爾は忍町支部設立にも関与したらしく、同支部発会式に出席し、演説をおこなうなど埼玉県における理想団の普及に力を尽している。<sup>14)</sup>

このように理想団の檄文が地方に浸透した一つの通路は、在地の青年団運動や地域集団であった。これら団体や集団は、理想団設立以前からそれぞれの地方で発生していたものであったが、「社会腐敗」という認識を共有していた。そして、理想団は時には日常道德実践という側面から、あるいは不満の代弁者という側面から歪曲をふくみながらも理解された。だが、ともかくもこれら団体の共鳴を経て理想団の影響が拡大していったことは確かである。特に、これら団体や集団は、一括加入したことが多かったため地方で多数の理想団加入者をえたのにはこれら通路の寄与するところは大きい。

しかしながら、これら青年団等は一時は理想団に大量加入しながらも次第に没交渉になっていく例が多く、これら団体から成立した地方支部も長期的に活動をした例はすくない。これには、これら青年団が前述の通り理想団の一側面しか理解していなかったこともあるだろう。その上、理想団本部も各支部の自主性にまかせると称し各支部と「思想の交換」を十分成立しえなかったためその理解の溝はうめられることがなかったのである。

---

ただし、これには萬朝報の円城寺天山と評論社員野附常雄とが「学友」であったという個人的関係が作用したらしい。

14) 「評論」1902年9月1日号

一時は理想団に共鳴したこれら団体も各自の運動の転回にしたがって疎遠になっていった。青年団等は官製の運動に再編成されていったであろう。また例えば、「評論」は1903年1月、大島寛爾が多忙を理由に引退し野附常雄が社長に就任してからは純然たる憲政本党の機関誌となった。<sup>15)</sup> 元来、「評論」には憲政本党系の寄稿者が多かったのであるが、同誌の依拠してきた実業家層が憲政本党を自己の代弁者とすることとし、単なる不満の代弁者としての「評論」の役割は終わったのであろう。

## 2. キリスト教信者を中心に設立された支部

キリスト教信者を中心に設立された理想団支部としては、安筑、小県、札幌、千葉等があり、また支部結成にまでいたらなかったが、岩手花巻<sup>16)</sup>等がある。キリスト教信者の大多数は、内村鑑三の影響下にあった者達であるが必ずしもそれに限られていたわけではない。また、青年団体等は組織を挙げて一括加入したことが多かったのに比し、キリスト者は少人数であったが自己周辺への拡大に熱意をもち、その集団形成のなかから支部が設立されていた。

理想団安筑支部は、南安曇郡東穂高村の研成義塾を中心に設立された。研成義塾は、禁酒運動等から小学校訓導の地位を追われた井口喜源治が、村内の有力者臼井喜代、相馬安兵衛や親友相馬愛蔵の援助のもとに1898年11月に創立した村塾である。<sup>17)</sup> のちに「穂高の聖者」とまで賛えられた<sup>18)</sup>井口喜源治のキリスト教信仰による教育は、この小塾を近隣において光彩を発する存在としていた。そして、1901年9月、井口等は内村鑑三を研成義塾に招き、

15) 「評論」1903年1月15日号

16) 岩手県花巻には、支部結成には至らなかったが多くの理想団員存在した。特に女性の加入者が多いのが注目される。これには、内村鑑三の影響をうけたキリスト教信者があったとみられる。特にその中心人物は、日露戦争中に非戦事件を起した斉藤宗次郎であつたろう。この事件については、斉藤宗次郎『花巻非戦論事件における内村鑑三先生の教訓』(1957年、クリチャンホーム社)等を参照。

17) 斉藤茂、横内三郎編『井口喜源治』(1979年、井口喜源治記念館)

18) 相馬愛蔵「穂高の聖者」前掲『井口喜源治』所収。



講演会を催すことにした。井口等は近在の「聖書之研究」「萬朝報」の読者を調査し、参加を呼びかけたうえ、<sup>19)</sup> 9月23日には内村鑑三出席のもと「萬朝報読者大会」を開催した。当日は、内村鑑三の理想団の趣旨説明があった後相馬安兵衛以下21名が理想団に加入し、支部を設立することを決議している。<sup>20)</sup> これら加入者につき内村鑑三は「皆な正直真面目の人々であって、其中に壮士めきたる空言者流、又は懶惰文學者等の非生産的人物ハ一人も見當らなかつた」「中以下の紳士的人士である」<sup>21)</sup>と表現しているが、支部結成の中心は研成義塾を支えていた近隣の自営農民・商人であつたとみられる。思想的には井口喜源治や相馬愛蔵が主宰していたという東穂高禁酒会以来のキリスト教信者かその影響をうけた者たちであつたろう。彼らと「萬朝報」との結びつきは、一つには内村鑑三によるところが大きく、読者会でも「朝報が悪に強きやうに善にも強からんことを」とか「三面記事を改められんことを」といった注文が出た通り醜聞摘発的三面記事には批判的であつた。またもう一方では、「新刊批評を尚は一層町重にせられんことを」<sup>22)</sup>といった要望から窺える通り東京の思想文化の動向に敏感な地方知識人である彼らは「萬朝報」を東京最新の思想文化の伝達媒体として愛読していたのである。

このように信州東穂高では理想団は、研成義塾を支える集団を通して普及し支部の結成をみた。しかし、その影響力は地域社会において決して幅広いものではなかつたであらう。研成義塾の集団は、内村鑑三の思想的影響もあり親愛で結ばれた堅固な集団であつたが、相馬愛蔵が認めている通り研成義塾の「生徒数が平均して30人ぐらゐであつて、それ以上に増えなかつたことは、そのまま村民と塾の教育の不一致を示すものであつて」<sup>23)</sup>と、研成義塾と近在の村民の間にある懸隔が存在していたことも確かであつた。それは、

19) 井口生「信州東穂高講談会日誌大略」『無教会』1901年11月7日号。

20) 同上。

21) 内村生「入信日記(5)」『萬朝報』1901年10月6日。

22) 内村生「入信日記(5)」前掲。

23) 相馬愛蔵「穂高の聖者」前掲『井口喜源治』所収

理想団支部の活動でも同様であったろう。

信州にあっては、内村鑑三の影響を受けた者達が、小諸や上田においても理想団支部を設立した。小諸支部の成立年月は不明だが、1902年5月21日に東京より黒岩周六と内村鑑三を招いて開催した春季大会には、団員二六名が参加し、次いで催した演説会には聴衆三百余名があったという。<sup>24)</sup>

信州上田は、内村鑑三が度々訪れ、内村の思想的影響の強い土地柄であった。内村は、1901年9月東穂高に赴く途中も、上田に滞在し地元有志と懇談している。しかし、この時には理想団支部結成の動きはなく、地元紙に理想団運動の不活発を嘆く投書さえ掲載されるほどであった。<sup>25)</sup> 上田に理想団小県支部が発会したのは、1902年5月22日である。当日は、本部から黒岩周六と内村鑑三が出張し発会式と演説会が開催された。発会式には、四十余名が出席当日入団したのも二・三十名あったという。<sup>26)</sup> 上田における支部結成がおくれたのは、内村の崇拜者はある程度存在していたが、安筑の研成義塾に比すべき中核的組織がなかったため、組織化に時間を要したのでであろう。

小県支部発足の中心人物の一人は成沢金兵衛（玲川）であった。成沢玲川は、当時二十代の青年、「萬朝報」「東京独立雑誌」を熟読し内村鑑三に傾倒し上京、内村の門を叩いたが一旦、上田に帰り、本屋を営業するかたわら内村鑑三、田口鼎軒、徳富蘇峰等東京や地元の言論人を招き講演会を行っていた。そして、同志と謀って理想団支部を結成したのである。<sup>27)</sup> また、支部

24) 「信濃毎日新聞」1902年5月24日。同記事によれば、小諸支部の中心になっているのは内村の友人の小山太郎である。

25) 「信濃毎日新聞」1901年10月10日「記者の机上」欄に「上田町の——生君」からの次の投書が紹介されている。

内村鑑三氏は上田の地を愛して「一個の独立郷」と云ひたれども、今や腐敗は上田をも見舞へり、殊に其青年をも見舞へり、萬朝社の理想団を歓迎して之に應ずるもの僅かに十指を屈するに過ぎざるが如き是れ其一徴候なり、青年諸子に望むらくは蹶起一番現下の腐敗を一掃して太郎の山麓千曲の河畔美はしき独立郷を建設せよ。

26) 「信濃毎日新聞」1902年5月24日。

27) 成沢玲川「内村鑑三先生の思い出」鈴木俊郎編『回想の内村鑑三先生』（1956年、岩波書店）

で活動した内村信俸者として栗山信夫がいる。<sup>28)</sup> 栗山信夫の生年は不詳だが恐らく当時二十代、旧上田藩士栗山誠藤の子、上田郵便局に勤務していた。<sup>29)</sup> 1899年頃内村の「警世雑著」等を読み、キリスト教信者となる。<sup>30)</sup> 1901年7月理想団が発足するや松野喜太郎とともに直ちに入団し、同年夏は内村鑑三の第二回角筈夏期講習会にも参加している。<sup>31)</sup> 小県支部にも内村鑑三信俸者として参加したのであろう。しかし、彼は安部磯雄の「社会問題解釈法」等を読み、社会主義に傾斜していった。のち、「平民新聞」が創刊されるや読者となり、度々投書を寄せている。<sup>32)</sup> 松野喜太郎とともに信濃上田地方社会主義談話会、社会主義研究会を設立するなどの活動をした後、<sup>33)</sup> 上京し一時は幸徳秋水宅に寄寓し社会主義活動をおこなった。だが、1910年10月実父に金策を強要し傷害事件を起こし懲役5ヶ月の刑を受けている。<sup>34)</sup> このように栗山信夫は、キリスト教を通過し社会主義者に転じていった地方青年であり、内村の影響下にあったとしても成沢玲川とは余程異なった人物であった。その他、小県支部には上田の著名な弁護士であり、代議士立候補の取沙汰されていた政治家立川雲平も加入するなど、<sup>35)</sup> 安筑支部と比較して人的には雑多

「理想団加入者報告」では第28回（1902年7月31日）に「信濃上田町成澤金兵衛」として登録されている。成沢は独学で、のち「東京朝日」に入社、計画部長やグラフ部長を歴任。評論活動でも著名。

- 28) 1902年6月7日の小県支部例会において「宮澤、栗山、立川、福田数氏の理想的演説あり」と報ぜられている。（「信濃毎日新聞」1902年6月9日）

「理想団加入者報告」では第19回（1901年7月22日）に「信濃上田鷹匠町栗山信夫、同幸町松野喜太郎」とある。

- 29) 上田市史編さん会『上田近代史』（1970年上田市）479ページ。

- 30) 「平民新聞」1903年12月27日「予は如何にして社会主義者となりし乎」

- 31) 「聖書之研究」1901年8月25日号「第2回角筈夏期講談会感想録」

- 32) 前掲「平民新聞」。前注「聖書之研究」掲載の「感想録」では栗山は出席者中唯一人講談会中の待遇につき不平を述べ、内村からたしなめられている。あるいは、この頃からすでに内村信俸の気持は薄れていたのかもしれない。

- 33) 「平民新聞」1904年4月3日号、4月24日号、5月15日号。

- 34) 『社会主義者沿革(下)』（明治文献史料刊行会）559ページ。

栗山信夫は、のちに信濃毎日新聞社記者を勤め、さらに1940年代には上田市議員に選出された（前掲『上田近代史』479ページ）

- 35) 「信濃毎日新聞」1902年5月24日は「立川雲平氏の如きも入団せしとの事なり」と意外な感をかくしていない。

な要素を擁えていた。

ところが、小県支部は支部として独自の支部規約を定めた上、<sup>36)</sup> 理想団本部と同様定期的に例会・晚餐会を開催するなど全国的にみても支部として最も活発なものの一つであった。<sup>37)</sup> しかも、初期の例会には40名以上の参加をえるなど規模も大きい。これは、小県支部が成沢玲川の如き内村鑑三の忠実な信俸者を中心としていただに理想団本部とのパイプも太く、忠実に支部規約・例会等の運営を心がけたためとみられる。また内村の信俸者を中心としながらもその中での差異あるいはそれ以外の人物をも包えていただに議論も活発に展開されたのであろうか。

ともかくも信州小県支部は、理想団の影響が内村鑑三からその信俸者に伝達され、更に地方の信俸者に媒介されてそれ以外の人物もある程度の組織化された一例といえよう。

さらに同様な例として札幌支部をあげることができよう。札幌は内村鑑三自ら「私の第二の故郷」<sup>38)</sup> と称した通り内村の所縁が深く、内村の創立した札幌独立教会が存在していた。しかし、理想団支部が発足したのは比較的遅く1902年10月頃とみられる。理想団創立間もない1901年10月に内村鑑三は札幌を訪れているが、札幌独立教会を中心とする説教活動が中心で理想団の組織化はおこなわれなかった。<sup>39)</sup> しかし、独立教会の中心人物であった宮川巳作、竹内余所次郎夫妻<sup>40)</sup>と前田英作等が理想団に加入しており、独立教会員

36) 「信濃毎日新聞」1902年6月9日。支部規約起草委員には、福田俊次郎、立川雲平、成沢理須三の3名を選挙でえらんでいる。規約の内容は不明。

37) 1904年5月迄晚餐会を開催していたことが確認できる。

38) 内村生「今秋の運動」「聖書之研究」1901年11月20日号。

39) この時の内村鑑三の札幌での活動に関しては、竹内余所次郎「札幌に於ける内村鑑三先生」「無教会」1901年12月5日号、内村鑑三「北上録」「萬朝報」1901年11月3日、前掲内村生「今秋の運動」などに詳しい。

40) 竹内余所次郎(1865~1927)旧金沢藩士の家に生まれ、金沢医学校・国民英学会などに学んだのち薬剤師試験に合格、北海道に渡り札幌で薬店を経営。1902年前田英吉と社会問題研究会を結成、「平民新聞」読者会を組織した。一時、米国に渡った後、日本社会党評議員等に任ぜられる。1921年ブラジルに渡り、同地で死去(『日本社会運

が理想団に共感を寄せていたのは確しかである。

彼らを札幌支部が発足したことは間違いない。

支部発足後は、定期的に茶話会や晚餐会を開催するなど活発な活動をおこなっている。札幌支部

部の全成員は不明だが、「理想団加入者報告」

第71回（1903年1月6日）は「札幌支部紹介」

として合計70人の氏名を載せている。<sup>41)</sup> この一

部の者には、職業の記入があり、表1にまとめ

た。これから分ることは、第一に学生は意外に

少なく、社会人が多いことである。先の安筑支

部等でもそうだが、「萬朝報」は東京での「書

生新聞」という評価とは別に地方では社会人に

読まれていたことが窺える。年令的にも若干高

い層を読者としていたであろう。第二に職業的

には会社員等の被雇用者は少なく、商業農業から医師等まで独立営業者が多

いことである。のちに札幌支部に招かれた幸徳秋水も「大抵獨立の事業に従

事せる人」<sup>42)</sup>と述べ、これを裏づけている。独立営業者は比較的自由に活動

できる上、東京の新聞雑誌書物を購読する経済的・時間的余裕をもつことがで

表1 札幌支部員職業

商	業	15人
新	聞 記 者	6人
農	業	5人
会	社 員	3人
弁	護 士	1人
医	者	1人
判	事	1人
画	師	1人
牧	師	1人
教	員	1人
学	生	1人
活	版 業	1人

動人名辞典』359ページ)

「理想団加入者報告」では第9回（1901年7月12日）に

札幌北三条西4の1，竹内余所次郎，同竹内みき

札幌南一条西2の9，前田英吉

宮川巳作は第68回（1902年9月14日）に南三条西の1，宮川巳作とある。

これは独立教会と同番地であり、牧師として教会牧師館に住んでいたのであろう。また、宮川と同時に11名の札幌居住者が加入しているが、恐らく独立教会関係者であろう。これら大量加入があつて、翌月札幌支部結成が可能になつたと推測できる。

41) これは、札幌支部全員ではなく、今までの「加入者報告」に未掲載の者だけを一括して載せたとみられる。

42) 在京同志宛幸徳秋水書簡（1903年8月11日）『幸徳秋水全集』第9巻（1968年，明治文献）229ページ。

きたのであろう。そして、札幌のような地方都市では、弁護士医者新聞記者等の新しい職業的知識人とともに質商時計商等の商人も共に広い意味での地方知識人グループを形成していたとみられる。理想団支部はそのような知識人グループの上に成立していたのである。第三には新聞記者が六名もいることである。理想団は、これら地方紙記者の媒介をへることによって「萬朝報」読者の枠を越えて第二次第三次に影響を拡大していくことができたとみられる。<sup>43)</sup>

また、思想的にはキリスト教の影響が強いが、特に団員一部にはキリスト教からの社会問題、社会主義思想への関心をもつものもいた。札幌支部晩餐会に出席した幸徳秋水も「會する者三十餘名にて、熾んに社會問題、宗教問題を闘はしぬ。」<sup>44)</sup>と社会問題と宗教問題が団員の中心論題であったことを述べている。例えば、先の竹内余所次郎と前田英吉は1902年6月に社会問題研究会を発足させ、各種社会問題の研究討議をおこなっていた。<sup>45)</sup> また、かつての自由民権家坂本直寛は、1902年2月キリスト教系の新聞「北辰日報」主筆に就任し、<sup>46)</sup> 理想団にも加入したが、一方小山恒次郎等と「労働者ノ社会的地位生活ノ向上ト相互扶助ヲ中心スローガン」<sup>47)</sup>として労働至誠会を結成

43) ただし、これら記者の所属した「北辰日報」「小樽新聞」が現存しないため、これら地方新聞において理想団がどのように報じられているかは確認することはできなかった。

44) 幸徳秋水「北遊漫録」『幸徳水全集』第4巻(1968年、明治文献)333ページ。

45) 「平民新聞」1904年4月17日

46) 坂本直寛「予が思想の経歴(続篇)」土居晴夫編『坂本直寛著作集(下)』(高知市民図書館)125ページ。

「理想団加入報告」では第71回(1903年1月6日)に(札幌)大通西七、新聞記者坂本直寛

とある。なお、前掲坂本文および土居晴夫『坂本家系考』(1968年、土佐史談会)108ページによれば、坂本直寛は1902年11月には旭川に転じており、この加入者報告とは時期的食い違いがある。恐らく、これは、実際の理想団加入時期と紙面掲載との時間的ズレによるものであろう。

47) 土居晴夫「労働ブローカー的人物」と目された坂本直寛『土佐史談』1969年3月号(第43号)。土居晴夫によれば、労働至誠会は1902年5月夕張において設立されたとの史料もあるようである。

した。同会の支部は夕張鉾山にもおかれ、南助松とも連絡があったという。この小山恒次郎なる人物も理想団の一員であった。<sup>48)</sup> このように札幌における理想団は、キリスト教を中心としながらも揺籃期の社会主義運動や労働運動の交錯点となっていたことがうかがえる。

札幌、小島の例をみてもキリスト者を中心とした理想団支部は、支部組織も確立し、活動も他支部に比較して継続した。また、当時の社会問題にたいして一定の問題意識を抱えた人物が集まってもいた。しかし、反面では中央の新思想の影響を受けた地方知識人として地元社会からある程度浮きあがった存在ともみることができる。それだけに、理想団支部は彼等の結集点として維持されたのであろう。だが、そこでの意識は、他に先がけて社会の腐敗に覚醒し批判しているという選良意識になりがちでもあったろう。それが、屈折して表現された時には地元社会からは奇異の眼でみられることにもなった。たとえば、小諸町の「理想団員は総て白色布製の夏帽を制帽としたる由にて近来町内に目立ちて見ゆ」<sup>49)</sup> という状況であったという。

また、このような比較的活発であった支部にあっても支部相互の交流はほとんどなく、理想団内においてさえそれぞれ孤立していたのである。地理的距離のため人的交流が困難であったという事情はあるが、各支部の活動内容は「萬朝報」にもほとんど掲載されなかった。各支部ではどのような討議が行なわれているか、どのような問題をかかえているかを互に知る機会をほとんど持たなかったのである。理想団中央とでさえも支部発会式等に幹部を招待するくらいで、偶々地方団員と幹部との個人的親交がある場合を除けば相互の交流は乏しかった。従って、地方支部は自主的ではあるが、自足的になりがちで、次第に疲弊し衰微していくことになったのである。

48) 「理想団加入報告」第68回 (1902年9月14日) に次の通り記載がある。

(札幌) 大通西6の10, 小山恒次郎

これは、前述の独立教会牧師宮川巳作と同時加入であり、小山は独立教会関係とみられる。

49) 「信濃毎日新聞」1902年6月2日。

### 3. 社会主義者を中心として成立した支部。

社会主義がキリスト教や社会政策等と未だ判然と区別せられない当時の状況にあっては、社会主義者というよりのちに社会主義者になる者といった方が正確であろうが、とにかくそのような者達によって組織された理想団支部も存在した。しかし、数は少ない。それは、当時の地方の社会主義者は未だ孤立した存在であり、キリスト者や青年団体の如き支部結成の母体となりうる相互の人的関係をほとんどもたなかったためであろう。寧ろ、社会主義者は理想団を通して相互の交信の機会をもち、集団形成していったのである。そのような例として理想団横浜支部をあげることができる。横浜支部は、1903年3月田中佐市、野村仁太郎を発起人として支部設置相談会開催が「萬朝報」紙上で呼びかけられた。ついで翌4月3日今度は横浜支部設置準備委員の名で「萬朝報」紙上に相談会開催が通知された。そして、4月23日漸く横浜支部発会式が開催されている。このように「萬朝報」紙上で相談会開催まで告知した例は、支部結成の手続きとしては横浜のみである。これは、発起人が支部結成の母体となりうる組織をもたず、新聞紙上の募集しか結集を促がす方法をもたなかったためであろう。支部発足後は、茶話会開催等の活動を行っていたが、その中心人物田中佐市と大和田忠太郎等は海岸教会に出入していたグループである荒畑勝三や鈴木秀男等と1904年8月に平民結社を結成し、次第に社会主義運動に入っていた。<sup>50)</sup> しかも、荒畑勝三が中央の運動に出ていったのちも、田中佐市、大和田忠太郎は横浜における活動を維持していた。この活動は、1911年大逆事件に関連する秘密出版配布容疑により捜索を受け、田中が不敬罪により懲役5年の刑をうけるまで続いた。<sup>51)</sup> このように

50) 荒畑寒村『寒村自伝(上)』(『荒畑寒村著作集第9巻』1977年、平凡社) 99ページ。荒畑寒村は理想団には加入してはいないものの「萬朝報」の愛読者であり、この点では田中佐市と近かったといえる。

田中佐市や大和田忠太郎の経歴は不明だが、前掲『寒村自伝(上)』の巻頭の平民結社結成の記念写真に彼等の顔がみえる。

また、この平民結社(横浜曙会)に関しては「直言」紙上に度々紹介がある。

51) 『社会主義者沿革』(下) 533ページ。



理想団横浜支部においては、孤立していた潜在的社会主義者が支部活動のなかからグループを形成し、社会主義団体を結成するまでになったのである。

この他、社会主義者が関係した支部に静岡支部がある。静岡支部は、1901年10月13日発起の準備と事務所の設置がなされ、1902年1月14日に正式に発足した。「萬朝報」記事によれば、静岡県下の理想団員は五十余人、支部創立の中心になったのは「薬種商、洗張職、基督教牧師、金具商、小学教師、新聞社等にして孰も正当なる職業正当なる労働に衣食する者」であった。<sup>52)</sup> その一人が小学校教師深尾韶である。深尾韶は、理想団静岡支部に参加したのち、北海道に渡り、次第に社会主義思想に傾斜していき、「平民新聞」に度々投書している。その後、上京して社会主義運動に入り、日本社会党結成などに参加した。<sup>53)</sup> 理想団静岡支部は、発足後の活動を伝える報道がなく、深尾の移住などで中心人物が離散し、自然消滅したとみられる。

この他、理想団を経て社会主義運動に入っていた者は数多く見られるが彼らのうちで理想団員として活発に活動した者は少ない。

以上述べてきた支部とは別に理想団の影響のルートとして労働組合等の組織が想定できる。実際、労働組合の有力活動家が理想団に加入している例はある。日鉄矯正会では、安居彦太郎、白井富次、田村竹蔵、藤田富太郎等の支部長クラスが理想団に加入している。<sup>54)</sup> また、この時期普通選挙運動を熱心に行なっていた深川理髪組合の高橋徳蔵等も加入している。しかし、これら組織の下部会員の人名が全く不明で、彼等を媒介にどの程度理想団に加入

52) 「萬朝報」1901年10月15日。深尾以外の人物は、伊藤三留、吉田豊作、野村国蔵、小澤千代吉、松井豊であるが、何れも不詳。

53) 深尾韶に関しては、市原正恵「深尾韶の生涯」「思想の科学」第75号。

54) 安居彦太郎は1898年の日鉄同盟罷行の際の被解雇者の1人で、争議の指導者であった。復職後は日鉄矯正会一の関、黒磯の支部長を歴任。（「労働世界」1898年6月15日、12月1日号等）

田村竹蔵は、1898年頃原の町支部長のち田端に転勤（「労働世界」1898年6月15日号）

白井富次は黒磯支部長、理想団発会式には祝電を寄せている。

高橋徳蔵については、「労働世界」1900年3月15日号、1901年1月1日号、7月21日号参照。

したかは知ることにはできない。ただ、彼等自体が、理想団員としては熱心に活動したわけではなかったので大量加入があったとは考えられない。一部の活動家のみが「社会改良」の理念に共鳴して加入したに止まったのだろう。

## 6. 第Ⅱ期の理想団

先にも触れた通り日露開戦論・非戦論は、理想団内においては論争点とならず、内村、幸徳、堺は萬朝報退社後も理想団には残った。彼等の公表した「退社の辞」でも「朝報紙編輯の事以外に於て、永く從來の交情を持続せんことハ、予等の深く希望したる所にして」<sup>55)</sup>と、理想団等の活動は継続することを読者に説明している。しかし、「平民新聞」に拠って社会主義運動を開始した幸徳秋水等にとって理想団運動を継続する意義は薄れていった。寧ろ、理想団と社会主義の違いを明確に打ちだし、理想団員あるいはその周辺の潜在的な社会主義同情者を「平民新聞」に吸引する必要性さえあったのである。

まず「平民新聞」紙上の理想団紹介で「朝報社の黒岩周六氏牛耳を把り時々演説集會を爲して主として風紀の矯正に盡力す社會問題に關する意見政策は別に一定するなきも其會員の多きは此種の諸團體第一に居る」<sup>56)</sup>と理想団と一定の距離をおく態度を示した。その上、幸徳秋水等は理想団席上さらに「平民新聞」紙上で「萬朝報」のおこなった「寶さがし」に全面的な批判を展開した。これは、「寶さがし」を題材に「萬朝報」の営利性と理想団の言行不一致を暴露しようとするものであった。その狙いが、理想団と「萬朝報」の限界を公然化し、逆に社会主義運動と「平民新聞」の正当性をアピールすることにあったことは明らかである。

「萬朝報」のおこなった「寶さがし」というのは、各地に債券等の宝をかくしておき、その場所のヒントを新聞紙上で発表するという企画である。この企画の目的は、言うまでもなく発行部数拡張であり、同種の企画はこの時

55) 堺利彦、幸徳傳次郎「退社の辞」『萬朝報』1903年10月12日。

56) 「平民新聞」1903年11月15日「社會運動彙報」

期の多くの新聞も実施していた。「萬朝報」は、このような手段による販売拡張をこれ以前は自粛していたのであるが、1903年の年末に「寶さがし」と米1升は幾粒あるかを懸賞募集する「米しらべ」を発表し、大々的に宣伝した。これにたいし幸徳秋水と堺利彦は、1903年12月6日に開かれた理想団談話会席上で批判を加えた上、この討議の模様を「平民新聞」紙上に公表した。<sup>57)</sup> その他「平民新聞」社説等でもこの問題を取りあげ、攻撃をおこなった。理想団談話会席上では、まず幸徳秋水が口火を切り、「予は讀者として、總ての新聞に望む所は、唯其評論記事に於て多くの利益快樂を與へられんことである。是が真正の精讀者の理想である。萬朝報社諸君も多分斯る讀者の精讀を望まれたのであろう、然るに其精讀を望むが爲めに催した寶探しの結果は、果して如何であったか、(中略) 數十數百人が1枚の債券を求めて其處を掘返し此處を掘返すのは實に一幅の滑稽畫である、否な滑稽は既に通り越して寧ろ悲慘と言はねばならぬ此一幅の悲慘の圖は慥かに今の社會の激烈な射利心、僥倖心、投機心を描き出したものである、今の社會の墮落を容赦なくサラケ出した者である、如此き墮落を予は理想團員として黙視するに忍びぬのである(中略) 予等の先輩長者たる朝報社諸君は、折角骨を折て立派な新聞を編輯され、其精讀を望まるゝ考へなるにも拘らず、却って斯る結果を見たのは、定めて遺憾とせらるゝ所であらう、予も亦理想團員として甚だ遺憾とする者であると結論した」。<sup>58)</sup> 幸徳秋水は、直接萬朝報社を攻撃せず、寶さがしの結果がもたらした社會の悲慘墮落を中心に論ずるという巧妙で皮肉な論法をとっている。それだけに社會の墮落を批判し社會改良を唱えてきた「萬朝報」と理想団の急所を衝いていたのである。この幸徳秋水の挑発にたいし黒岩周六は「寶探しに就て、幸徳君は予等が精讀を望むの意を諒して

57) 12月6日理想団談話会の模様は、「平民新聞」12月13日で報道されているが、さらに12月27日に詳細な討議記録が掲載されている。12月27日号は社説「恐る可き罪惡」でこの問題を論じているほか、これに関する記事や投書も掲載され、「寶さがし」批判特集号といった様相を呈している。

58) 「平民新聞」1903年12月27日。

下さった、併し正直に白状すれば予等の此等を行ふのは幸徳君が買ってくれた程の立派な理由からではない、實際營業上の競争の必要よりやって居るのである、現時新聞の競争は殆ど極度に達し、中には言ふに忍びざる不徳の手段を弄するのもある、此間に立って自己の生存を保つが爲には有力なる競争を爲さねばならぬ、此点に於ては、予は競争を非とする社會主義の人々とは、根底から其意見を異にしている（以下略）」<sup>59)</sup>と反論したという。さすがに黒岩周六は、宝さがしが精読を奨励するためであるという大義名分をタテにとることができず、それが營業的動機に基づくことを告白をせざるをえなかった。そして、營業上の必要性に居直って、社会における競争という一般論で防戦しているのである。黒岩の反論をうけて立ったのは、堺利彦であった。堺は「予等が平民新聞をやる覺悟も其通りで、唯だ信ずる所に依て、爲し得る所を力めるのみで、何の策略も掛引もない、若し平民新聞にして、多少の價值あり、社會に貢獻する所があるならば、社會は予等を養って呉れるであらう、社會が養って呉れなくなれば、夫は新聞に價值がない需用がないからだと覺悟して慎しんで廃刊するのである、決して種々な策略で強て賣付けやうとはしないのである」<sup>60)</sup>と、「平民新聞」の理念を説いている。社会改良

59) 前注同。

60) 前注同。

ここでは、堺利彦は「平民新聞」の非常利性を高く掲げているが、平民社にとってこれは決して尋常の問題ではなかった。たとえば懸賞による販売拡張とは全く別問題だが「平民新聞」掲載の広告については度々読者から投書が寄せられている。

たとえば1月10日号には「平民新聞紙上に掲載を見合せて戴きたき者は呉服屋、煙草屋、時計屋、売薬屋の広告、殊に商事会社の決算報告に御座候」等とある。これに平民社同人は「有害の広告は固より載せぬ積りでありますが、何分今日の新聞事業にては広告が大いなる収入となって居りますので、無益な広告位は大目に見て戴かねばなりません」と答えている。

また1904年1月21日号には非戦論の新聞に何故好戦的な出版物の広告を掲載しているのか、「ア、汝平民新聞は偽善者也」という投書が載せられている。これには、「各新聞雑誌の広告面なる者は、本紙とは余程性質が違ふのです」と説明している。

これらの投書から窺えるは、読者の方が社会主義新聞「平民新聞」の非営利性に過剰なまでの期待を寄せていることである。平民社同人は、逆にある程度まで現実的に対処していかなければならなかった。

を掲げてきた「萬朝報」の実施した「寶さがし」が社会の悲惨墮落を助長し、しかもそれが營業的動機に基づくものであることを告白させた上で、それと対照的な「平民新聞」の理念を提示しているのである。このように幸徳秋水と堺利彦は、「寶さがし」批判を通して「萬朝報」の營利性と理想団の底の浅さを暴露し、それを克服する運動としての平民社と「平民新聞」の正当性を訴えていった。理想団と平民社の間に明確な一線を画することは、平民社が「理想団の延長」<sup>61)</sup>であるという性格をもつだけに幸徳等平民社同人そしてまた「萬朝報」から「平民新聞」に移った読者<sup>62)</sup>にとっても必要な作業であったのである。

以後堺利彦等は、1904年4月頃まで理想団会合に出席していたらしく、その度に「平民新聞」紙上に理想団会合の批判的記事を掲載している。<sup>63)</sup> 批判するために出席していたのであろう。そして、恐らく1904年の中頃には出席もしなくなり、全く理想団から離れたとみられる。

一方、幸徳秋水等から厳しい批判をうけた「萬朝報」の「寶さがし」と「米調べ」は内務省警視庁の命令により各新聞社が同時期に実施していた各種の福引懸賞とともに禁止されてしまった。これは、乱脈な新聞販売競争が行政権力の規制によって収拾されるという新聞業界にとって不名誉な事件であったが、「萬朝報」はこの禁止措置を「其筋の地位に立て見る時ハ大體に於て當然の處分たるに違ひ無い」と肯定し、「新聞社の中ハ随分狼の様なのが有りますよ、少し油斷すると又法律を潜るのが出て來ますよ、目を見張って嚴重にお取締り成さい」<sup>64)</sup>と取締りを歓迎してさえいる。「萬朝報」としては、福引等による販売拡張が「撥亂反正の手段」であることは十分承知していたが、他新聞がこのような手段をとり、その結果新聞売捌店が被害をうけてい

61) 前掲白柳秀湖文。

62) 「平民新聞」12月27日号に理想団員竹内余所次郎の「宝さがし」に失望した投書が載っている。

63) 「平民新聞」1904年3月20日。

64) 「萬朝報」1903年12月30日「其筋と新聞紙」

る、しかも内務省がこれを黙許している、「此様に成た者を、何うすれば治める事が出来る、手段ハ外に無い、多年賣捌から信頼せられて居る朝報が奮起して、迷へる讀者に適從する所を知らしめ、狂へる各社に目に物を見せ、麻痺した様な其筋をビックリさせる一方だ」<sup>65)</sup>と、「萬朝報」の企画は被害をうけている売捌店救済と悪弊を黙許している内務省への警告を目的としていたのだと正当化した。このような自己の営利を隠蔽しようとする強引な論法は、逆に理想団席上における幸徳秋水等の批判が黒岩周六にとっては手痛いものであったことを窺せる。

「寶さがし」と「米調べ」によって幸徳秋水等から批判をうけ、しかも警視庁の命令によって中止を余儀なくされた「萬朝報」は、社告において讀者に謝罪し、「謝する手段ハ益す紙面の善美に力を盡すのが差當りの良法と信じ、既に空前の策を案に定めました」<sup>66)</sup>と、福引等による販売拡張をあらため紙面改良に力をつくすことを宣言した。この紙面改良の第一着手が、1904年3月から実施した活字縮少による記事量増加である。<sup>67)</sup> また、紙面改良と相前後して理想団の新方針をも発表した。この紙面改良と理想団の新方針は、内村鑑三や幸徳秋水の退社さらには社会主義者の批判によって打撃を受けた「萬朝報」と理想団を再建しようとする表裏一体の政策であったのである。黒岩周六が新しく打出した理想団の方針とは、「團員個々の人格品性を高くして社會を改良しやうと云ふ」理想団は、「今までの所を見ると修身と云ふ方面ハ多少認められたけれども、社會改良と云ふ方面ハ殆ど空漠に成て居

65) 前注に同。同社説は新聞売捌店の状況について「朝に恐迫せられて一方の新聞紙の売附けねば成らぬ仕宜になるかと思へば、夕にハ又他から依頼せられて他の新聞を売込まねば成らぬ情実と為る、漸く定まるかと思へば又讀者が動く、代価は取れぬ、勘定は手が廻らぬ、各本社からは責られる、大く云へば塗炭の境遇である」と描写している。社會の理想を説く新聞が陰で引き起している乱脈な新聞販売と悲惨な販売店の状況は現在と全く同一である。

66) 「米調べ実行広告」「萬朝報」1904年1月2日。

67) この活字縮少策の經營的意義に関しては、拙稿「萬朝報經營における「向上主義」とその限界」(桃山学院大『社会学論集』第11巻第1号)

る」<sup>68)</sup> という反省の上にたち、「修身の上にも猶も社會の實地問題に対して多少の意味を持つのが、團の本来の旨意だろう」と「社會の實地問題」に活動を展開していこうとするものであった。このため団の組織に変更を加え、新たに常務委員を設置することとし、黒岩周六、山県五十雄、塩谷恒太郎の3名を選任した。<sup>69)</sup> 常務委員設置の狙いは、言うまでもなく団の活動に機動性と指導性をもたせることにあり、「自然に團員諸君に對して本部から交渉する事も多くなるであらう、地方支部の行動に對しても注意を與へたり提醒を加へる様な事も無くてハ成らぬ」<sup>70)</sup> と述べている通り、従来自主性に委されていた一般団員や地方支部の活動に對しても常務委員の指導性を強めようとしたのである。

このような常務委員の指導による「社會の實地問題」への活動は、従来の各人の自省修養を最重視する理想団の枠を一步踏みだしたものである。無論、このことは黒岩周六も十分に認識しており「團員銘々自分の身を修めると云ふ事が即ち社會の一部を改良するに当るのでハ有るけれど」、實地問題への活動も必要だと慎重な限定をつけて読者に訴えている。この路線変更には、理想団内において個人の修養を最も強調していた内村鑑三の退社ということが大きく作用しているであろう。理想団内においては、既に述べた通り個人の修養から社会改良へという正統的発想とともに社会・政治問題から個人の改良という逆方向の発想も潜在的に存在しており、内村の退社とともに逆方向の発想が次第に顕在化してきたといえる。また、運動としても各個人の内面の修養のみを説き、団としての結集点が存在しないならば、一般団員の休眠化を阻止することは困難である。その上、幸徳秋水等による社会主義運動の胎動という新しい事態に処すということからも黒岩周六は社会實地問題において何らかの結集点を提示し、理想団運動の活発化を促がそうとしたので

68) 黒岩周六述「理想団の事に就て」「萬朝報」1904年2月16日。

69) 前注に同。

70) 前注に同。

ある。

社会実地問題に乗りだすにあたって、黒岩等の常務委員は理想団の運営の改革をも試みようとした。それは、公開講演会の開催と「萬朝報」との関係の密接化である。公開講演会とは、従来隔月に催していた随意談話会を改組したもので、その特色は団員は誰でも事前に申込みさえすれば自由に演説をおこなえることにしたことである。既に指摘した通り、理想団は団員相互の間の「思想の交換」を掲げながら、中央本部における萬朝報社周辺知識人の自足的サロンでの「思想の交換」が中心で、一般団員との間には中央本部からの一方通行的啓蒙しか成立しなかった。これを是正するため閉鎖的な有志晩饗会を改め開放的な随意談話会という形式をとったのであるが、これを更に改め団員が自由に自己の主張を演説できる公開講演会を催すこととしたのである。

また、理想団と「萬朝報」の関係密接化とは、理想団と萬朝報社が別組織であるという原則からこれまで理想団の活動が不十分にしか報道されてこなかったのを改め「理想団の行動ハ必要な限り朝報の紙上で報道する」ことにしたのである。しかし従来、中央本部からの一方通行的情報伝達がほとんどであったにせよ「萬朝報」紙面に理想団の活動が報道されてこなかったわけではない。それにもかかわらず黒岩周六が従来の報道は不十分だったと認識し、改めて積極的な報道を唱えたのには、幸徳秋水や堺利彦等による「平民新聞」の影響があったのではないか。「平民新聞」は「其編輯は 予等之に任ずと雖も、予等は決して之を以て予等の私有と爲さずして、滿天下の同主義者が公有の機關と爲さんことを望む」「其紙面は 常に滿天下の 同主義者の爲めに、忠實なる代弁者たり、通信者たり、更に能ふ可くんば其助言者たり、指導者たるに至らんことを期す」<sup>71)</sup>と宣言した通り、各地の社会主義者からの投書や運動報告とそれにたいする平民社同人の返答に紙面の少からぬ部分

71) 堺枯川、幸徳秋水「発刊の序」「平民新聞」1903年1月15日。



がさかれ、ある程度「思想の交換」がなされていたのである。<sup>72)</sup> かつての理想団の有力活動家達が発行する「平民新聞」を見て、黒岩周六としても「平民新聞」と同様な方法をとるかはともかく、「萬朝報」において理想団員相互の思想交換を実現していこうとしたのではないだろうか。

このように公開講演会といい「萬朝報」との関係の密接化といい黒岩周六等常務委員の目指した改革は、一部のサロンとそれを起点とする一方通行的啓蒙という従来の理想団内部のコミュニケーションを縦にも横にも拡大活性化あるいは双方向化しようとするものであったといえる。それによって理想団全体による社会実地問題への取り組みが可能になると考えられていたのである。

しかしながら、この新路線はほとんど見るべき成果をあげることができなかった。公開講演会は、隔月に開催され、一般団員の演説申込みを促がす告知が発表された。しかし、一般団員による演説はきわめて少なく、次第に演説申込みを呼びかける社告も掲載されなくなっていった。<sup>73)</sup> また、「萬朝報」紙面においても理想団関係の記事は特に増加していない。一般団員からの投書等も掲載もなく、わずかに新たに「萬朝報」の論説を担当することとなった茅原華山の理想団での演説が「言論」欄に度々載るようになったこと程度である。改革が不成功に終わったのは、一般団員にとって公開の場での演説等は心理的に敬遠しがちである。また紙面においても折からの日露戦争の戦時報道に忙殺され理想団のための新企画の紙面余裕がなかったというような改革案自体の不充分さもあるだろう。しかし、それよりも理想団内において改革を実現できる客観条件がもはや存在していなかったことが決定的であったとみ

72) 本稿では内村鑑三の活動についてはほとんど触れえぬが、内村の発行していた「東京独立雑誌」「聖書之研究」「無教会」等においては様々な「思想の交換」があったように見える。特に読者会である教友会は注目される。ただ、内村と読者との信従的關係は、「平民新聞」等の読者とは余程違ったものであろう。

73) 公開演説会開催の社告には、著名演説者名とその他数名という記載が多く、一般団員の演説を正確に把握するのは困難である。少なくとも1905年に入ってから、一般団員の演説は行なわれておらず、演説申込みの社告も掲載されていない。

られる。即ち、一般団員の多くは、既に理想団への強い参加意識を失っていた。以前からあった地方支部のうち1904年に入っても活動を継続していたのは土浦支部、小県支部、横浜支部ぐらいであった。また、新方針発表後設立された支部は印旛郡木下町支部のみであった。<sup>74)</sup> 常務委員が「地方支部の行動に對しても注意を與へ」ようとしても肝心の地方支部の多くが休業状態にあったのである。既に述べてきた通り、理想団の運動は一過性の性格が強い。団の内部に成立した萬朝報周辺知識人の自足的「思想の交換」とそこを起点とする一方通行的啓蒙は、中央本部のサロン化と一般団員の休眠化を促進、固定化していったのである。また、団員の中でも地方支部設立するなど熱意のある者の多くは、内村鑑三や社会主義者の影響が強く、彼等の退社によって理想団への意欲も醒めていったとみられる。これに対して黒岩周六等が改革を実施し、団内のコミュニケーションの流れをも変えようとした時点では、既に時機を失していたのである。そこでは、改革も空回りするしかなかった。

一般理想団員を活性化することに失敗したのと裏腹に黒岩周六等を社会実地の問題への運動を唱えながら、具体的主題を提示することができなかった。寧ろ、彼らは日露開戦後の好戦熱の渦中に身を投じ、「国民的後援大演会」等の活動に熱中していくことになった。理想団の活動としては、有志晩餐会と演説会の交互開催という形式だけは維持されたが、晩餐会出席者、演説者のメンバーは固定し、中央本部のサロン化と一方通行的啓蒙というコミュニケーションの型は一層強化してしまった。

日露戦争後もこのような形での理想団の活動は続き、わずかに何らかの運動を提起しようとしたのは、1906年1月に理想団有志総代の名で発起された東北地方の饑饉への同情物資募集にすぎない。<sup>75)</sup> しかし、このような主題での金品の募集は多くの新聞が好んで実施するものと変わらず、理想団の独自性

74) 1904年4月14日支部発会。但し、組織実態等は全く不明である。

75) 理想団有志総代謹述「饑饉地に送る同情袋」「萬朝報」1906年1月31日。  
理想団有志総代述「同情袋に対し寄附金を募る」同上1906年2月7日。

はほとんど発揮されてはいない。

しかし、半面では理想団が本来目指したものからは後退しているにせよ、萬朝報社を中心とする都市新興知識人の会合と公開演説会による社会問題への啓蒙活動が理想団において維持され続けたことは、社会の歪みがより一層顕在化してきた日露戦後の社会においてそれなりの意義をもっていた。少なくとも他新聞と比較して「萬朝報」を社会問題に対して敏感で活動的な新聞としていたのである。

## 7. 第III期以降の理想団

日露戦後の理想団にとって大きな転機となったのは、1911年8月の新しい「理想団主意」の発表であった。これによって理想団は個人の修養を通じての社会改良運動という性格を一段と薄め、政治運動的性格を強くもつようになったのである。理想団にこの転機を与えたのは、1911年7月の東京街鉄市有化反対のキャンペーンであった。「萬朝報」は都下の新聞のなかでも特にこのキャンペーンの先頭に立ち、大きな役割を果たしたのである。

東京の市街電車は、日々膨張する都会東京の象徴であると同時にその裏側に山積してくる都市社会問題の象徴の一つでもあった。1905年ポーツマス講和条約反対運動で焼打にあったのを初め、翌1906年社会党等による電車賃値上反対運動、1908年には再度電車賃値上反対運動と市街電車は日露戦後の社会において物議の材料となってきた。その上、1911年7月電車市営移管問題が起ってきたのである。この電車市有化にたいして市会の一部と諸新聞の間から買収価格が著しく高価であり、市民に過重な負担を課するという反対運動が起った。特に「萬朝報」は連日紙面において反対論を展開し、尾崎行雄市長を攻撃したばかりでなく、演説会や屋内市民大会を主催するなど実際運動にまで乗りだした。その上、市会開会当日の7月8日には日比谷公園において「示意運動」を組織し、市民を動員することに成功した。<sup>76)</sup>「萬朝報」

76) 7月7日神田錦輝館に屋内市民大会を主催した上、翌7月8日日比谷公園において

は文字通り全社をあげて市有化反対運動に傾注し、たんなる新聞社としてより政治運動体として活動したともいえる。市営移管が市会で可決されて後も「萬朝報」は追及を緩めず、移管手続きが商法違反だと主張して平田内相への公開質問状を公表した上、裁判所に訴訟を提起することさえ行なった。

電車市有化反対運動で燃えあがった「萬朝報」は、「電車市有ハ一小事なり、既に概ね過ぎ去らんとす、唯だ立憲の世に斯くの如き不合理の手段を公然推行することを大問題と為す、此問題ハ過去ざるなり、今も後も苟くも我國に絶て不合理の行はれざるに至る迄ハ依然として存せん、吾人ハ國民として、不合理なる一切に反対するを合理とす」<sup>77)</sup>と、全面に展開していこうとした。そこには、「吾等ハ此の不合理の滔々たるを征せざれば新聞紙の存在も無意味」という新聞の使命観さえ存していたのである。そして、この「新なる戦闘開始」の一環として理想団の再建も試みられたのである。

1911年8月1日、黒岩周六は「理想團員諸氏に告ぐ」という論文を発表し理想団において政治的活動を行なっていく新方針への賛同を呼びかけた。「理想團ハ主として團員各自の道念を強固にするを勉め來れり、政治に對してハ唯意見を吐露するに過ぎざりき、之がために其の存在ハ漸く認めらるゝに至りたるも、其活動ハ認められず、乃ち認めらるゝまでに活動せざりしなり、余自らハ活動せざるを得ず、國民を政治的に生きしむるが爲めに、我が立憲の政治を合理的ならしむるが爲めに、將た世の不合理なる一切と戦はんが爲めに、願くハ諸君、余の意を諒せられよ」

---

示意運動を組織した。「萬朝報」は、この「示意運動」について「今迄の屋外集会は動もすれば不穩に陥ること有りしより、爾來屋外集会とし云へば最初より不穩を意味する如く解したる人も有り、其れが爲め屋外集会は甚だ催ほし難き事の様に思考せられ、公明なる立憲的運動に不便を來したる事情も無きにあらねば吾等は此機會を利用し世間に向つて模範的屋外集会を示さんと欲する者也、來会者に於て充分其意を誤とせられんことを請ふ」と述べ、この集会をもって従來の焼打と異なる「模範的屋外集会」の実物教育としようとしたのである。このため「銃器凶器を携ふる勿れ」などの警告を呼びかけるなど細心の注意をはらっている。

77) 黒岩生「合理の爲に戦へ」「萬朝報」1911年7月24日。

ついで8月4日新たな「理想団主意及規約」が発表された。<sup>78)</sup>「主意」で訴えられていることは、やはり「合理」の貫徹である。「理想団ハ合理を以て主義と爲す、即ち一切の合理の為に、合理なる一切の手段を尽して、不合理なる一切と戦はん。」不合理のなかでも特に「今や吾人の眼に映ずる不合理の最大なる者ハ我國の立憲政治が合理的に運用せられざるに在り、立憲政治本来の筋道ハ『國之本ハ在リ民ニ』の義より出づ、須く人民の權利を重んじ人民の意思を強盛にして議會を制し、議會の意思を以て政府を制すべし」と民本主義<sup>79)</sup>による政府の合理性貫徹に理想団の目標をおいている。

この新しい「主意」には、創立当初の理想団にあった個人の修養を通じての社会改良という発想は、ほとんどみられない。「先づ人民の合理的意思を強盛にし、之を根拠として議會を責め……」と、運動の原点を個人に置くことは同一であるが、そこで求められているのは創立当初の如く個人の内面における修養ではなく、国民の政治的権利の自覚・覚醒である。また、社会改良という目標は失なわれ、立憲制の「合理」的運用実現に全てが集中される。この場合の「合理」とは「『國ハ以テ民ヲ爲ス本ト』の主張に照して合理なる方に興す」という、いわば民本主義を原則とするものであった。この点では政治運動としての新しい理想団は、同時期の他の新聞の論調と比較すれば、進歩した地点にまで到達していたといえるだろう。だが、反面では創立期の

78) この時発表された新しい理想団規約とは次の通りである。

1. 理想団員は、天皇陛下に忠にして國憲を重ず
  2. 理想団員たらんとする人は住所、姓名、職業、年齢を明記し、理想団幹事に申込むべし、幹事に於て其申込を原簿に記入するを以て入団の手續を了したる者とす
  3. 理想団員は常に『以正自持、以理相責』の本義を忘れず、先づ自個を合理にして勢力を養ひ、以て社會の不合理を征せんと勉むべし
  4. 理想団員は常に『國以民爲本』の主張に照して合理なる方に興すべし
  5. 地方理想団員は1年に1回以上、自費を以て便宜の時、便宜の處に、最寄理想団員と共に集會、演説、運動等を行ひ、合理的意思の強盛なるを世に示すべし
- (6, 7 省略)

79) 言うまでもなく、ここでいう「民本主義」とは後に吉野作造の主張した「民本主義」とは同一ではない。

理想団にあった焦点は定まらないが明治の社会をトータルに視野に収め、何らかの新しい運動を展開していこうとする志向は既になく、立憲制という明確だが既存の枠組みのなかでの合理性追求の運動になってしまった。それは、理想団規約第一条に「理想団員は、天皇階下に忠にして國憲を重ず」というステレオタイプ化した文言をおいていることにも表れている。

新しい理想団の運動は、国民の政治的教育・国民の政治的自覚促進を当面の目的とするのであるから、理想団幹部による一方通行的啓蒙運動であることは当然視される。運動の形態としては、幹部中心の晩餐会と幹部による演説会が踏襲強化された。地方への出張演説に応ずる旨の広告も掲載され、地方への運動侵透も再び試みられた。しかし、紙面記事によるかぎりでは地方演説会は活発ではなかった。<sup>80)</sup> また、新規約発表を機に、理想団員の加入手続きがとられたが、団員名簿の紙面発表はなく、全く不明である。恐らく団員の再加入、地方への侵透などの組織再建は十分な成果をあげえなかったとみられる。新しい理想団の組織は、実質的には萬朝報社記者とその周辺の知識人のみであつたろう。

下部への組織化は成功しなかったものの晩餐会と演説会は定期的で開催され、理想団の活動は続いた。しかも、折から憲政擁護運動とシーメンス事件という理想団の掲げる運動目標と相似する政治運動が勃発した。「萬朝報」は各新聞の先頭にたち「憲政擁護」のキャンペーンを展開し、理想団も運動に参加していった。特に「萬朝報」は、これら運動のキャンペーンのなかでつねに国民にとっての運動の意義を説き、国民の政治的自覚を訴え続けている。<sup>81)</sup> そして、その一つの帰結として普選の必要性を主張するまでにいたっ

80) 確認できた地方演説会は、1911年8月4日土浦萬朝報読者会主催の理想団政談演説会のみである。これには萬朝報幹部の黒岩周六、伊藤亀雄、茅原廉太郎が出席している。土浦萬朝報読者会とは、それ以前に存在した理想団土浦支部を継承したものと推定できるが、いずれも組織実態等は不明。ただ、土浦支部は1904年7月頃迄活動を継続し、戦死者追悼会を催すなど理想団支部のなかでも異色の支部である。

81) これらの政治運動を通して「萬朝報」の到達した「国民の自覚」論の問題については、

た。これは、閥族打破あるいは政党再編という狭い政治的枠組のなかでしかこれらの事件を説くことができなかった多くの他新聞に比較すれば異彩をはなっている。「萬朝報」は、国民の政治的教育を目指す理想団運動の一環としてこれら運動のキャンペーンをはっていったのである。

しかし、「萬朝報」の到達した民本主義も内相問責記者運動とそれに続く大隈内閣支持が躓きの石となり、急速にその声望を失なっていたのは周知の通りである。また、これと同時併行的に萬朝報社の経営も疲弊していった。結果的には、憲政擁護運動やシーメンス事件は「萬朝報」と理想団にとって最後の輝きであったともいえる。1910年代後半も理想団は、晩餐会や演説会という活動を継続しているが、最早運動と呼べるものではなく、演説会などは各新聞や団体の時局講演会と変りがなくなってしまった。萬朝報社の主催する演説会がたんに慣習的に理想団演説会と呼称されるにすぎなくなったのである。そして、1920年10月、黒岩周六が死去し、理想団の支えもなくなってしまった。その後も萬朝報記者を中心に理想団演説会晩餐会が開催されているが、過去の声望を利用しているだけである。最終的に理想団が何時消滅したかは、今回調査したがぎりでは不明である。

### おわりに

理想団は、「萬朝報」という一新聞社が読者を組織化し、社会改良運動を起したという稀有な事例である。「萬朝報」は危険を避けつつ企業化に向っていた同時期の他新聞に比して、異なる軌跡を描いた新聞だったといえる。しかし、反面そこでは否応なく「萬朝報」の新聞活動の様な問題点が露呈されることになった。

理想団が一時は大きな反響を引き起しながら、黒岩周六も認める通り「殆ど空漠に成て」いったのは、その思想の曖昧性もあろうが、やはり団員相互

---

拙稿「大正初期における『国民自覚論——「萬朝報」の事例を中心として』『新聞学評論』第21号。

の間に「思想の交換」をつくりだしていくことができなかったことにある。東京や地方の読者は、その生活現場で痛感する社会の腐敗から理想団の社会改良の呼びかけに共鳴し、理想団に加入した。だが、その個々の経験を理想団中央あるいは団員相互の間で伝達・交換する機会をほとんどもてなかった。たまたま既存の組織や集団に所属していた団員が支部を結成したにすぎない。多くの団員は、理想団に加入してもさしたる活動もなしに社会腐敗への痛憤は自家消費されるか、他の運動へ流れ込んでいってしまった。理想団内に成立したのは、中央本部と一部の支部でのサロンの「思想の交換」と「萬朝報」による一方通行的コミュニケーションであった。それを是正することも度々試みられたが成功せず、結局、団の掲げた「社会改良」の内実を内側から発展させていくことができなかったのである。間歇的に中央本部から新しい方針が提起されるものの一過性に終らざるをえなかった。そして、次第に活動力を消費し衰微していくことになったのである。しかも、理想団の衰退は「萬朝報」の独自性の低下であり、理想団の声望を失った「萬朝報」には経営政策的限界が顕在化してこざるをえない。「萬朝報」は、その経営政策の限界を露呈し、急速に衰弱していったのである。